



## 鈴木大拙の思想における宗教経験とその現代的意義 [論文要旨及び審査の要旨]

著者	末村 正代
発行年	2015-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第548号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/9103">http://hdl.handle.net/10112/9103</a>

[5]

氏名	末村正代 <small>すえむらまさよ</small>
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	文博第228号
学位授与の日付	平成27年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	鈴木大拙の思想における宗教経験とその現代的意義
論文審査委員	主査教授 井上克人 副査教授 宮本要太郎 副査教授 小田淑子 専門審査委員 准教授 杉本耕一 (愛媛大学)

## 論文内容の要旨

本論文は、禅思想家である鈴木大拙（1870-1966）の禅論と浄土思想論を、それぞれの宗教経験に着目することによって統合し、体系化することを目的としている。大拙の禅論と浄土思想論は、これまで多くの研究において個別に論じられてきたが、本論文では大拙の〈宗教経験〉というひとつの事象を中心に据えて両者の関係を考察することで、大拙思想の全体をより体系的に解き明かそうとした試みである。

1章では本研究の目的とその意義、執筆の動機を述べ、考察の手順を略述している。

2章では、従来の大拙研究を三種に大別し、それぞれの代表的な研究を挙げてその特徴を概説している。三種の区分とは、①大拙思想の解説・紹介的研究、②哲学者・西田幾多郎（1870-1945）との関係を論じた研究、③思想内容や教義理解に対する批判的研究である。

①では秋月龍珉（1921-1999）の研究を取り上げ、秋月の研究の特徴を、大拙思想にキリスト教学、特に滝沢克己（1909-1984）の「不可分・不可同・不可逆」の思想を取り入れることによって個と超越の関係をより明快に論じた点と、大拙が大乗経典に基づいて提唱した「即非の論理」を大拙自身よりも一層論理的に究明した点であると指摘している。②では竹村牧男（1948-）の研究を取り上げ、竹村の功績として、大拙と西田に関わる膨大な資料を精査することで両者の影響関係をより詳細に明らかにした点と、両者の思想の共通性だけでなく、その違いをも明確に指摘した点を挙げて論じている。③では末木文美士（1949-）の研究を取り上げる。批判的研究は4章で詳述されるが、ここでは末木の大拙思想に対する「倫理観の欠如」と「他との関係の希薄さ」という批判の要点に触れるにとどめている。2章では、大拙の「即非の論理」に対する先行研究の解釈をいくつか例示し、先行研究において「即非の論理」が実際にどのように説明されているかを簡単に紹介している。

3章は、大拙の禅論と浄土思想論との関係を〈宗教経験〉という事象を軸に、①プロセスと②力学という2側面から考察している。①プロセスでは宗教経験に至る過程を五段階に分けて、各段階において大拙の禅論と浄土思想論がどう展開しているかを比較している。五段階とは、(A)「矛盾と不安」、(B)「疑と信」、(C)「問いかけと呼びかけ」、(D)「宗教経験の瞬間」、(E)「見と聞」の五つである。(A)の「矛盾と不安」とは、日常で矛盾と出会う

ことで漠然とした不安を感じる段階、つまり宗教経験のきっかけとなる段階である。これは禅にも浄土思想にも共通している。(B)「疑と信」とは、不安が生じたことよって日常を支配する論理・分別に対する眼差しが変化し始める段階である。論理・分別に対して疑問が生じるという禅の姿勢と、論理・分別の世界に絶望してそうではない世界(浄土)への信仰が生じるという浄土思想の姿勢を比較する。(C)「問いかけと呼びかけ」とは、「疑と信」という論理・分別に対する姿勢が宗教的行為(修行)へと変化する段階である。禅の修法は問答という「問いかけ」形式であり、浄土思想の修法は阿弥陀の名を称える称名念仏という「呼びかけ」形式である。(D)は、大拙が「否定即肯定」と言う宗教経験の瞬間が、具体的にどのような瞬間であるかを述べている。宗教経験の瞬間とは、日常的な論理・分別が否定されて絶対性を失うと同時に、論理・分別から解放された存在が絶対肯定される瞬間である。禅と浄土思想それぞれの修法を重ねることで、日常的な論理・分別を自覚的に認識し、その非絶対性が明らかとなる。これによって非絶対的な論理・分別に基づいている自己や事物の自己同一性も絶対性を失う。換言すれば自己や事物は非絶対的な論理・分別から解放される。論理・分別から解放された「ありのまま」の姿(実相)で存在していることが肯定される。(E)「見と性」では、「否定即肯定・肯定即否定」という宗教経験の瞬間が禅と浄土思想ではそれぞれどのように説明されるのかを論じる。禅はこの瞬間を見性といい、浄土思想はこの瞬間を聞名という。見性とは論理・分別の非絶対性という本性を見抜く瞬間であり、聞名とは阿弥陀の声を聞く瞬間、つまり往生が確定してこちらの世界(此土)が完全に否定される瞬間である。禅の見性に関連して、見性の智慧である般若と、見性の論理である即非の論理を取り上げる。また浄土思想の聞名という経験に関連して、宗教経験が持つ受動性と超越性について触れる。②力学では、宗教経験がどのような力学によって統率されているのかを考察している。①プロセスの考察において、宗教経験によって「否定即肯定・肯定即否定」という「ありのまま」の在り方が肯定されることが明らかとなった。「ありのまま」で在ることを仏教では如と表現する。この如は論理・分別によって囚われていないという点で「何ものでもない」在り方である。「何ものでもない」とは言い換えれば、「何にでもなり得る」在り方である。つまり如という「ありのまま」の在り方は、真に自由な在り方という意である。大拙が宗教経験において強調したのは、この自由の獲得であった。宗教経験の動態は、日常的な矛盾の感得から始まり、再び「否定即肯定・肯定即否定」という矛盾へと至る運動、つまり始点と終点が同じ円環運動である。宗教経験の始まりが矛盾によって引き起こされるのは、始まりの段階において「否定即肯定・肯定即否定」の如(終点の矛盾)が働いているからである。このように宗教経験とは如の促しによって起こる円環運動、つまり如の力学によって統べられた運動であるということをも明らかにしている。

4章では、近年の大拙思想に対する二者の批判を取り上げ、それに応える形で大拙思想の現代的意義を考察している。2章でも取り上げた①末木文美士は大拙思想について「倫理観の欠如」と「他との関係の希薄さ」を指摘した。②島藺進(1948-)は「社会实践の不足」を指摘した。①「倫理観の欠如」という指摘には、大拙の思想が善悪・是非に限らず、すべての論理・分別によって成り立つ対立概念の絶対性を否定する思想であることを述べた上で、このように対立概念を共有していない段階で倫理観に対する批判を行うことに対する疑問を提示している。①「他者との関係の希薄さ」と②「社会实践の不足」という批

判は、ともに他者をめぐる問題として一括し、この問題に対しては日常において他者と関わりを絶えず求められる現代にこそ、論理を超えた自己の根底との関係を追求する大拙の思想が意義を持ち得るのではないかと主張している。

5章は本論考の総括である。宗教経験という脱論理的な事象を宗教的言語に依拠することなく論理的に論じる困難は解消されたとは言いがたく、今後も考察を続けるべき課題であることを述べる一方で、宗教経験という事象を禅と浄土思想の双方向から同時に考察する方法はこれまでの研究にない新しい方法であり、大拙の禅論と浄土思想論に対する理解を相補的に深め、より包括的に理解する有益な方法であることを明らかにしている。

## 論文審査結果の要旨

仏教とは、畢竟するに転迷開悟、転凡入聖ということに尽きる。しかるに日本天台宗では、始覚法門と本覚法門とがあり、前者は「従因向果」の法門と呼ばれ、修行の因を積むことによってその結果として悟りの智慧に向かう方法であるのに対し、後者は「従果向因」の法門と称され、衆生本来仏也という「果」の自覚に立って、この果を開顕すべく修行してゆく方法を取った。とかく禅宗の立場も、悟りの境涯から表現され、浄土系仏教における絶対他力の立場も、本覚論に基づき、いずれの衆生も阿弥陀如来による摂取不捨の利益に既にあずかっていること、いかなる「信」も如来から賜った「信」であることが説かれる。要するに、禅も浄土系仏教も、いずれも「従果向因」の立場に立っての説示が主たる特徴となっている。しかし根本仏教の立脚地からすれば、「諸行無常・諸法無我・一切皆苦」という人生の根本矛盾への撞着から始まって、そうした「苦」からの解放を願い、「涅槃寂靜」へと至る修行的プロセスは当然考えられなければならない。大乘仏教における浄土系仏教であれば、末法的歴史観に立って、煩惱熾盛や罪障の自覚から始まり、「厭離穢土・欣求浄土」が切実なる実存的な課題となろう。しかるに、このように矛盾を自覚させ、そこからの解放へと向かうプロセスの根柢には、そうしたプロセスの全体を内から包摂し、初めから見えない形で導いている「内的促し」が働いているのであり、そこにはいわば円環的な構造を持っていることは注意されてよい。

さて、世界の禅者、鈴木大拙という人間、思想を論じるに当たって、どういう角度で、またどういう切り口で扱うかは甚だ厄介な問題を含んでいる。本論文の筆者も、これまでそれを暗中模索してきたが、今回提出した本論文は、筆者がとかく禅者として見なされる鈴木大拙の「思想」の中に、禅にも浄土系仏教にも通底する彼の「宗教経験」に着目し、それを「プロセス」と「如」の力学という筆者独自の視点に立って、上記の問題をなんとか自分の言葉で論述しようと努力を傾けて書き上げた意欲的な労作である。

したがって、本論文の特徴は、以下の2点に纏められる。

- ① 「宗教経験」に注目し、禅論と浄土教論とを合わせて包括的に論ずること。
- ② 大拙の思想をより論理的に明らかにすることで外部にも開かれたものにすること。

まず第一の点だが、従来の大拙研究が、ともすれば禅や浄土真宗といった諸宗派の枠組の中で論ぜられる傾向があったのに対して、本論文では、大拙の「宗教経験」に注目することにより、特定の宗派、あるいは特定の宗教の立場に限定されない視点から大拙の思想を捉え返す可能性を開いている。それは、なぜ大拙の思想が宗教・宗派の枠組を越えて、

禅を扱った著作が浄土教の信徒に共感を与えたり、仏教を扱った著作がキリスト教徒に共感を与えたりすることができるのか、その理由を明らかにする視座を提供するであろう。

次に第二の点について言えば、本論文では、大拙が「宗教経験」を論ずるに当たって、論理を越えた経験の重要性を賞賛したり、現象として現れた事実を客観的に描いたりするだけではなく、その論理構造の解明を行っていたことに着目し、禅に関する論著、浄土教に関する論著の双方を通覧してそれを取り出そうとする。この試みは、諸宗教に通ずる宗教の本質的な構造を照らし出し、特定の宗教の枠組を越えた宗教哲学・宗教思想として大拙の思想を捉え返すための有効な視点であると考えられる。

本論文は、大拙が論ずる「宗教経験」として、いわゆる禅の「見性」体験に見られるような悟りの瞬間の経験に加えて、矛盾・不安からはじまり分別的な日常のあり方の否定へ、そして再び否定を経た上での肯定へと戻ってくる「プロセス」にも言及する。「宗教経験」を、単に瞬間の経験としてだけでなく、そのプロセス全体を含んだものとして理解する視点は、筆者の大拙理解の独創的な点であり、大拙の思想の深い理解に基づくものであるといえる。また、それらの「プロセス」を通じてはたらいっているものとして、「如」という思想に注目し、「如」の「力学」を明確に取り出してきている点も、きわめて重要な指摘である。それは、上述したように、個人における宗教経験の背後にあって、個人において宗教経験を可能ならしめている個人を超えたものの構造を明らかにするという、宗教哲学の根本問題に触れるものであろう。

ただ、問題点としては、先行研究との対決のいくつかの場面で、当該の先行研究の趣旨が必ずしも十分に汲み取られていないのではないかと思われる点、大拙の浄土教理解の特徴を明らかにするために、浄土教の教学との対比が試みられているが、多岐にわたる教学の議論がやや単純化されているようにも見える点などが、挙げられるかもしれない。

更に言えば、「宗教経験」に関する大拙の議論が、「禅」を前提としているのか、「大乘仏教」を前提としているのか、それとも「宗教」一般を前提としているのか、必ずしも明確ではないと思われる点である。「宗教経験」という以上、最後の立場にあるとも見なしうるが、そうであるならば、「宗教経験とは禅の見性体験、つまり悟り」（21 ページ）という前提から、そのプロセスの始点を「矛盾の感得」（25 ページ）に限定して論じることには問題はないだろうか。大拙の「宗教経験」論に対する論者自身の批判的眼差しが求められよう。

次に、先行研究（とりわけ末木と島菌）に対する批判に関しては、論点が十分にかみあっていないために、必ずしも有効な批判になりきれていないことが惜しまれる。その理由として、4 章で展開されている批判・反批判の議論の地平が、3 章で明らかにされた「宗教経験」論とうまくリンクされていない点が挙げられよう。

大拙思想の「現代的意義」に関しても、いかなる点で「現代的」なのか、どのような「意義」を有しているのかについて、十分に議論が尽くされているとはいいがたい。とくに「他者との関わり」にとって大拙の「宗教経験」思想が有する意義を、もっと大拙自身の言葉に即して詳細に論じてほしいが、それは今後の研究の課題として期待するところである。

最後に一つ、評者としての希望を述べておきたい。禅思想と浄土思想を、従来より統合的に理解できたと筆者は言うが、大拙に寄りかからず、宗教哲学の事柄として、浄土思想の深みを理解して、再度検証することは今後必要であろうと思われる。大拙の言葉で説明される浄土思想は、「信」の大事な面、罪業の自覚の深さをいま一つ捉えきれていないよう

な感じが残るからである。

さて、以上のように、いくつかの問題点は見出せるが、大拙の禅論と浄土思想論の両面からアプローチすることで「宗教経験」に関する大拙の思想をよりダイナミックに論証するという本研究の試みは、学術的な意義と重要性を高く有するものであり、また、宗教哲学・宗教思想の立場での大拙研究としての本論の論旨に必要な一定程度の論述はなされていると考えられるので、上述のような積極的意義を汲み取るためにも、本論文は博士論文として価値あるものと認める。